

学生ボランティアツアーリストの観光経験 ～インドネシアのノンフォーマル教育学校での国際協力活動を事例に～

和歌山大学観光学部 松本頼憲



1. 研究目的

1) 観光形態が多様化する今日、ボランティアツーリズムは新しいツーリズムの形として特に注目を集めてきた。一方で、近年のボランティアツーリズムの様相から、新植民地主義と批判する論説も根強い。

2) **McGehee(2012)** ボランティアツアー組織が意識的な体験の機会を十分に準備し、対立や不平等に対する意識が高まればボランティアツーリズムの参加者はより**社会的意識の高い経済的・社会的行動を日常的に取り入れるなど実際の変化の可能性は非常に大きくなる**

3) **Guttentag(2009)** ボランティアツーリズムがもたらす可能性のある負の影響
①**現地のニーズの無視**②**作業の妨げや中途半端な作業**③**現地の経済の混乱**④**他者の合理化と貧困の合理化**⑤**文化的変化の誘発**

→しかし、その両者においてボランティアツーリズムに参加する観光者の経験それ自体にフォーカスされることは少なかった。

本発表では和歌山大学のクリエイティブ・プロジェクトの一つであるWakayama ASEAN Projectで行われている学生ボランティア団体CUBE（以下CUBEと略称）の活動を事例に、CUBEのメンバー、そして現地での活動をともに行う現地大学生団体のNURAGA（以下NURAGAと略称）のメンバーが**どのような観光経験をしているのか**について調査を行い、ボランティアツーリズムが上記のように**二項対立的なものなのかを明らかにする**ことを目的とする。

3. 研究方法

CUBEに対しては1対1のインタビュー形式を、NURAGAに対してはGoogle formを用いた調査を行った。前者は9人、後者は15人から回答を得た。

4. CUBEのボランティアツーリズム経験の多様な語り

元々国際協力活動に関心があった。介入のし過ぎ、一方通行になってしまわないことを念頭に置いている。しかし、地域の一部しか知らないでニーズの把握が難しい。企画を立案する段階で**仲間と話し合い、考えることで国際協力考える機会**になると思う。(経済学部3年, 女性)



↑写真③ 実際の活動風景

活動当初は就活の**ガクチカ目的**だった。現地に行く前は、物乞いなどされるのではないかと考えていたが、実際行ってみると子供達の目はきらきらして、**偏見があった**ことに気づいた。情報の最大値が日本と違うため、子供達にチャンスが少なく、挑戦の機会が失われていると思う。衛生環境もよくなく、自身が現地でフットサルをした際に**大気にやられ咳が止まらなくなった経験が、自身の就職活動の際の業界選択にも大きな影響**を与えた。(経済学部4年, 男性)

根本的にはなにも変わらないと感じた。ただ生まれた場所が違うだけで**同じ人間だと感じた**。(観光学部3年, 男性)

ピックアップの子として生まれると将来の選択肢が少なくなる悪循環に陥ると思う。**外の世界を知って視野を広げてほしい**。子供達にとっては現地の環境は普通で、**可哀そうとは思わない**。(経済学部3年, 女性)

最初は**国際協力などの活動に関心は無かった**。最初こそホストコミュニティを良くする、という考えがあったが、地域の人たちが牧歌的に暮らす様子を見て自分達が好ましいと思うものが**本当に現地の価値観に沿っているか疑問**を持つようになった。(経済学部3年, 女性)

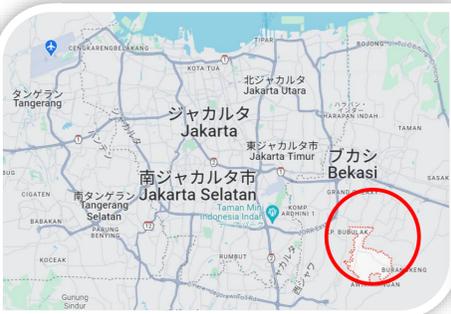
6. 考察

従来の研究では、自己実現や自己成長のためのボランティアツーリズムは新植民地主義的であると批判されることも多く、そのような空間の消費に付随する社会貢献という謳い文句は、時に偽善であるともされてきた。近内(2020)はボランティア活動の参加者について、「主体」が「誰か」に与えると意識した途端、そこに計算的思考が働き、その「計算可能な贈与」は「偽善」であると断言している。しかしながら、今回のCUBEとNURAGAへの調査で見えてきたボランティアツアーリストの姿は、自己実現やキャリア、経験、時に就職活動といった様々な自己実現の手段として利用しながらも、現地コミュニティの理解を試み、現状と向き合いながら活動に取り組むものであった。すなわち、**社会貢献対自己実現といった構図を乗り越え、一見相反する2つの思惑が共存するツアーリストの二重性**である。加えてNURAGAに対するアンケートの結果は、活動以前にBantar Gebang地区について知らなかった人ほど、活動を通してその印象に大きな変化があったことを示した。その中には、授業の一環として現地に訪れたものの、その経験から大きなショックを受けたというメンバーも存在した。このことから、ボランティアツーリズムにおいても、イメージや認識が変化することが大いにあり、他者イメージの理解を目指し、**無意識の内に本質化されたイメージを克服する手段**としてその意義を持つことが、5章での学生への調査との対比で明らかになった。

2. Bekasi市、Bantar Gebang地区概要

Bantar Gebang地区はJakartaに隣接するBekasi市の中でもJakartaにほど近い南西に位置しており(写真①)、同地区にはJakartaで発生した多くのゴミが運ばれている(写真②)。そのような現状から、ピックアップ(山積されたごみ山の中から担当のごみを集めることで賃金を得る)として生計を立てている住民も少なくない。彼らの多くは出稼ぎであるため、戸籍を持っていないケースが多く、当地では公立の学校ではなく現地財団が設立した学校に通っている子供達が多く存在している。CUBEはそのような子供たちが通う、国家教育省の管轄下でノンフォーマル教育を実施するコミュニティ学習活動センター(PKBM: Pusat Kegiatan Belajar Masyarakat)のひとつであるS学校にて、現地のBina nusantara大学(以下BINUS大学と略称)の学生団体NURAGAとともに教育支援活動を行っている。

今回調査を行うに先立ち、BINUS大学のBekasiキャンパスに通う無作為の学生8人(NURAGAとは異なる学生)を対象にBantar Gebang地区の印象について聞き取り調査を行った。その結果、**広い、臭い、ごみ山、不幸、悲しい、汚い**といったキーワードが挙げられた。特に不幸や、悲しさ、汚さに関する言及が多くみられた。彼らはBantar Gebang地区には訪れたことがなく、また、Bekasi市に住む人以外でBantar Gebang地区とその現状についての認知度はそれほど高くないことがわかった。



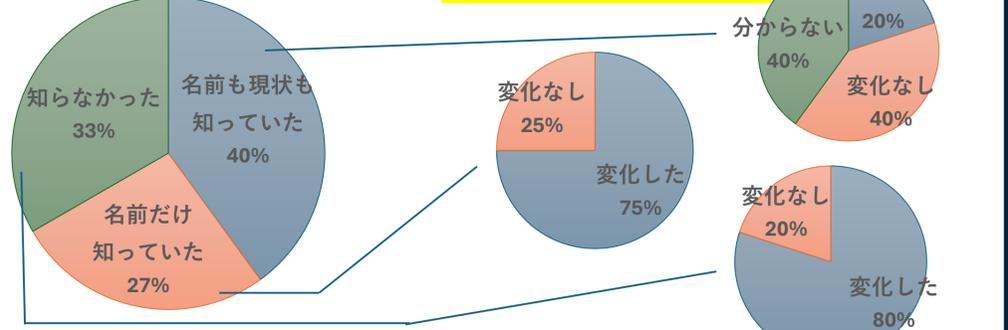
↑写真① Bantar Gebang地区の場所



↑写真② S学校の裏手から見えるごみ山の様子

5. NURAGAのボランティアツーリズム経験の二重性

活動を決めたときにBantar Gebang地区を知っていたか? 訪問後に地域に対するイメージは変化したか?



訪問前後のイメージの変化について、
貧困で不幸なイメージがあったが子供達の目が輝いていた、想像よりは酷くなかったといった意見

↑
●実際に訪れることで無意識に抱いていた**偏見が覆った**ことを示す
☑Bantar Gebang地区を知らなかった学生ほど訪問後にイメージが変化＝実際に訪れることで気づきや変化をもたらしている

日本人と関わりたい、「社会貢献」をしてみたかったなどの意見

●**新たな経験をするためにBantar Gebang地区での活動が自己実現の手段**として利用される

4) 東(2014)

観光は本来身を置く環境から逸脱し、無責任な他者として境界を乗り越えることで自身のステレオタイプを克服し、他者との緩い連帯を生む

5) 藤山(2017)

学生ボランティアは無責任な「緩い他者」としての立場からホスト・コミュニティとの間で、働きかけとその受け入れを巡る相互関係の中で両者が「気づき」を得て変化する

参考文献
1) Mary Mostafanezhad(2013), THE POLITICS OF AESTHETICS IN VOLUNTEER TOURISM. Annals of Tourism Research, Vol. 43, p. 150-169
2) McGehee, N. G. (2012). Oppression, emancipation, and volunteer tourism. Research propositions. Annals of Tourism Research, 39(1), p.101.
3) Guttentag, D. (2009). The possible negative impacts of volunteer tourism. International Journal of Tourism Research, 11, p537-551.
4) 東浩紀(2014),弱いつながら. 幻冬舎文庫
5) 藤山一郎(2017),国際協力における「緩い」よそ者の役割. 立命館国際地域研究 第45号 2017年3月
6) 近内悠太(2020),世界は贈与でできている. ニューズピックス, p42-43
7) <https://www.google.com/permissions/geoguidelines/?hl=ja> (最終閲覧日2024年6月20日)
8) 写真②③は筆者撮影